

Child Adjustment and Parent Efficacy Scale — Developmental Disability (CAPES-DD) の日本語版作成の試み

江上千代美* 塩田 昇*

Reliability and Validity of the Japanese Version of Child Adjustment and Parent Efficacy Scale — Developmental Disability (CAPES-DD)

Chiyomi Egami Noboru Shiota

要 旨

【緒言】発達障がいのある子どもは情緒や行動の問題を呈するリスクが高く、成人期まで持続する傾向にあり、家族全員に影響を与える。従って、子どもの情緒や行動と親の子育てと家庭への適応の簡便で適切なアセスメントツールと根拠に基づく保護者への支援が必要とされている。本研究はCAPES-DDの日本語版を作成し、PAFASとともにその信頼性・妥当性を検証することを主な目的とした。

【方法】発達障がいのある子どもの母親に無記名自記式質問紙（育児効力感・育児負担感・子どもの情緒や行動の問題・PAFAS・CAPES-DD日本語版）を合計439部配布し回答を得た。日本語版作成にあたり、原版からの翻訳および逆翻訳を踏まえて検討を重ねた。

【結果】CAPES-DD/PAFASの各ドメインのクロンバックの α は0.6-0.8程度で内的信頼性、級内相関係数では再テスト信頼性が確認された。PAFASの子育ての一貫性および親としての適応のクロンバックの α は著しく低かった。構成概念妥当性は部分的に確認された。

【考察】CAPES-DD/PAFASともに一定の信頼性・妥当性が確認された。一方、CAPES-DDの構成概念妥当性では原版と異なるドメインが抽出され課題を残した。PAFASの子育ての一貫性・親としての適応においては内的信頼性・構成概念妥当性・再テスト信頼性が低く、再検討が必要である。

キーワード：発達障がいのある子ども 保護者 CAPES-DD PAFAS トリプルP

緒 言

保護者は発達障がいによる情緒や行動の問題も含めて、子どもの健やかな発達を促し、情緒や行動の問題に対して適切に対処できるようになることが求められる。その介入支援の一つとして、トリプルPがある。トリプルPは世界25か国以上で活用されている社会学習理論を基盤とした家族相互作用プログラムである。加えて、このプログラムはポピュレーションアプローチを基盤としており、すなわち、すべての子どもの保護者を対象とした予防的介入をベースとして組み立てられていることも大きな特徴である¹⁻³⁾。

ところで、子育て支援プログラムを用いた介入支

援は多いものの、そのアウトカムが明確になっていないものが多いと思われる。一方、トリプルPは介入支援のアウトカムを明確にしており、WHOが最も根拠のあるプログラムとして認めている⁴⁾。子育て支援を行う専門職者にとって、それぞれのプログラムの効果の根拠を把握し、かつ保護者へのインフォームドコンセントに基づいた介入が重要と思われる。

トリプルPの主要アウトカムとしてThe Child Adjustment and Parent Efficacy Scale - Developmental Disability (CAPES-DD) とThe Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) は開発され、高い信頼性と妥当性が認められている^{5,6)}。これらは、子どもの適応と親の効力感および子育てと家庭への適応を包

*福岡県立大学
Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地
江上千代美
E-mail: egami@fukuoka-pu.ac.jp

括的に測定できるツールである。PAFASは定型児の保護者を対象に子どもの情緒と行動の問題と親の効力感を測定するCAPESと合わせて日本語版が作成されている。しかし、その信頼性・妥当性が検証されているものの、内的信頼性・構成概念妥当性・再テスト信頼性に課題があり、項目の再検討の必要性が報告されている⁷⁾。CAPESは定型の子どもの適応と親の効力感を測定できるツールであるため、発達障がいのある子どもの適応と効力感を測定するにはCAPES-DDの日本語版を作成する必要がある。さらに、発達障がいのある子どもの情緒や行動の問題に対するアセスメントに基づいた根拠のある保護者支援を行うためには、CAPES日本語版⁷⁾と同様に、PAFAS⁷⁾とあわせてCAPES-DDを包括的に測定できるツールが必要である。

今後、発達障がいのある子どもの保護者にトリプルPを実施するにあたり、トリプルPの効果の測定を可能にするため、藤岡らの研究方法⁷⁾を参考にして、

CAPES-DDおよびPAFASの信頼性・妥当性を検証することを本研究の目的とした。

方 法

1. 対象

子育て講演会に参加している発達障がいのある2歳から12歳の子どもの保護者を対象とした。

2. CAPES-DD日本語版の作成

研究者3名が協議を重ねて、英語から日本語に翻訳した(順翻訳)。英語圏での生活経験があり、トリプルPに携わっていない日本人が日本語訳を英語に翻訳した(逆翻訳)。逆翻訳による表記と原版的表記を比較して、意味が通りにくい、曖昧になっている箇所を修正して、最終の日本語版とした(表1)。

3. 質問紙配布・回収

2018年9月から2019年5月に開催された6回の講演会にて、本研究の目的を口頭と文書で説明するとともに、無記名式自記式質問紙を渡し、研究協力に

表1 CAPES-DD日本語版

子どもの情緒・行動の問題スケール (30項目)
行動スケール (18項目)
かんしゃくを起こす (○) 日々の自分の身の回りの世話を協力する (例: 着替え) * 感情を適切に表現する * 他人に失礼な音や言葉を発する (○) 怒鳴る、叫ぶ、または絶叫する (○) 大人の注目を受けずに何かをしていることができる * 他人の注目を必要とする (○) 感情的になったり (例: 泣く、悲しむ) 傷ついたりしている人をなだめる * 私 (親) または他人を傷つける (例: 叩く、嘔む、引っかく、つねる) (○) 大人と仲が良い * 物を壊す (○) 他人と物を共有する * ぐずるまたは文句を言う (○) 適切に何かを要求する * 頼まれたことに協力しない (○) 何か欲しいものがあるときに辛抱強く待つ * 活発過ぎる、または落ち着きがない (○) 友達と仲が良い *
情緒スケール (12項目)
一人で過ごす時間が過剰だ (○) 何かを恐れたり怖がっているように見える (○) 自分自身を傷つける (例: 叩く、嘔む、引っかく、つねる) (○) 物や空間を凝視する (○) 自分自身に対していい感情を持っているようだ * 自分が慣れている人から離れると感情的になったり (例: 泣く、悲しむ) 怒ったりする (○) 手や体の動きを何回も繰り返す (例: 手をヒラヒラさせる、体を揺り動かす) (○) 習慣や周囲の変化に動揺する (○) 食べ物の好き嫌いが多または食べない (○) 活動的ではない・物事に無関心だ (○) 思い当たる理由もなくすぐに泣く (○) 不満または悲しそうに見える (○)

* 逆転項目、文末 (○) はCAPES-DDの親の効力感について表している。

同意をした人は講演会終了後に回収ボックスに質問紙を記入の上、投函した。また、講演会終了時に質問紙を投函した参加者に、1か月後の再テストと返信用封筒を入れたセットを持ち帰ってもらい、1か月後に郵送にて返信するように要請した。

4. 質問紙

配布した質問紙を次に示す。

1) 育児負担感

中嶋らによる育児負担感指標⁹⁾を使用した。社会的活動制限の認知4項目と否定的感情4項目の計8項目で構成される。5件法であり、スコアが高いほど問題があることを示す。本研究におけるクロンバックの α は0.88であった。

2) 育児効力感

育児に対する自己効力感尺度 (PSE尺度)⁹⁾を使用した。13項目で構成される。5件法であり、スコアが高いほど育児効力感が高いことを示す。本研究におけるクロンバックの α は0.86であった。

3) 子どもの情緒と行動の問題

The Strengths and Difficulties日本語版 (SDQ)¹⁰⁾を使用した。行為、多動、情緒、仲間関係、向社会性の5つの下位ドメインの合計25項目で構成される。3件法であり、スコアが高いほど問題があることを示す。本研究におけるクロンバックの α は0.81であった。

4) The Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) 日本語版⁷⁾

原版では子育てに関する18項目と家庭への適応に関する12項目の計30項目で構成されている。子育てに関しては子育ての一貫性・強制的なしつけ・前向きな励まし・親子関係の4つの下位ドメインで構成されている。家庭への適応に関しては親としての適応・家族関係・親のチームワークの3つの下位ドメインで構成されている(表2)。各項目とも4件法であり、スコアが高いほど問題があることを示す。日本語版に関しては定型児の母親を対象としたPAFASの子育ての一貫性および親としての適応において、内的信頼性・構成概念妥当性・再テスト信頼性に課題を残し、項目の再検討が必要とされている。しかし、今回の対象者は発達障がいのある子どもの保護者であり、定型児の保護者と異なるため、内的信頼性・構成概念妥当性・再テスト信頼性について再検討することとする。

5) The Child Adjustment and Parent Efficacy Scale — Developmental Disability (CAPES-DD) 日本語版

CAPES-DD intensity scale 30項目を使用した⁹⁾。CAPES-DDは子どもの情緒および行動の問題(Intensity scale)とそれらに対処できる親の効力感(Efficacy scale)を測定する。CAPES-DDは2016年にintensity scale 24項目¹¹⁾が報告されているが、海外と異なる日本の養育環境や養育の文化を考慮するため30項目⁹⁾を使用する。なお、本研究ではCAPES-DDのintensity scaleのみを因子分析する。

子どもの情緒および行動の問題に関しては内向(以下、情緒)の問題に関するドメインが12項目および外向(以下、行動)の問題に関するドメインが18項目の合計30項目で構成されている。各項目とも4件法(0:全くあてはまらない、1:少し、時々あてはまる、2:かなりあてはまる、3:大変よくあてはまる)であり、スコアが高いほど問題が深刻であることを示す。

親の効力感については情緒の問題に関するドメイン12項目のなかの11項目、行動の問題に関するドメイン18項目のなかの9項目の合計20項目(情緒と行動の問題に関する同じ項目)について、情緒や行動に対処する自信度を1(全く対応できない)から10(対応できる)までの10段階で回答する。スコアが高いほど親の効力感が高いことを示す。

5. 分析

PAFAS日本語版とCAPES-DD日本語版については信頼性を確認するためにクロンバックの α を算出した。また、尺度間の相関はSpearman相関係数を使用し、PAFAS日本語版・CAPES-DD日本語版の構成概念妥当性の検討には主因子法によるプロマックス回転により因子抽出後に因子分析を行った。再テスト信頼性の分析のみ再テストのデータを用いた。

6. 倫理的配慮

対象および講演会の主催者に対して、口頭および書面にて研究の目的、方法、無記名式質問紙であること等を説明した。本研究は福岡県立大学倫理部会(H30-28)により承認された。

結果

1. 質問紙の配布と回収

質問紙は439部配布し、回収ボックスに投函された質問紙は301部であり、欠損値のない255部を有効回

表2 PAFAS日本語版

PAFAS子育ての適応
子育ての一貫性 子どもが言われたことをしない時には、根負けして自分でする 子どもが好ましくない行動をとっている時に、その結果となるものを使って対処する（例：おもちゃを取り上げるなど）* 子どもが好ましくない行動をとっている時、何かが起こると脅す（例：テレビを消すなど）が、それを実行しない 子どもの好ましくない行動には、いつも同じように対処する* 子どもが怒ったりパニックをおこしたりした時には、子どもが欲しいものを与える 強制的なしつけ 子どもが好ましくない行動をとっている時、子どもに怒鳴ったり怒ったりする 子どもの好ましくない行動に対して、教訓となるように子どもにいやな思い（例：罪悪感や恥）を感じさせようとする 子どもが好ましくない行動をとっている時は、子どもをたたく 子どもの行動や態度について子どもと言い争う 子どもにイライラする 前向きな励まし 子どもが好ましい行動をした時には、おやつ、ほうび、または楽しい活動を子どもに与える* 子どもが好ましい行動をしている時には子どもをほめる* 子どもが好ましい行動をとっている時、子どもに注目する（例：抱く、ウィンクする、微笑む、キスをするなど）* 親子関係 子どもと話す* 子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい* 子どもを誇りに思う* 子どもと一緒に過ごすのが楽しい* 子どもとはよい関係だ*
PAFAS家庭への適応
親としての適応 ストレスを感じる、または心配だ 幸せだと感じる* 悲しい、または落ち込んでいると感じる 自分の人生に満足している* 子どもが感情的になった時、もしくは親自身が落ち込んでいたりストレスを感じたりしている時、親として一貫した対応ができる* 家族関係 私の家族はお互いに助け合う、または支えあう* 私の家族はお互いに仲が良い* 私の家族はケンカする、または言い争う 私の家族はお互いを批判する、またはお互いをみくだす 親のチームワーク 子育てでは、私はパートナーとチームとなって動く* 子育てについてパートナーと意見が食い違う パートナーとはよい関係だ*

* 逆転項目

答とした（有効回答率58.1%）。再テストについては299部配布し、欠損値のない154部を有効回答とした（有効回答率51.5%）。

2. 内容妥当性

質問紙には尺度ごとに記入例を配布していたが、CAPES-DDの親の効力感の回答に欠損がみられた。

CAPES-DDの30項目は「大変よく当てはまる」から「全く当てはまらない」の範囲で回答されていた。また、PAFASの30項目は「大変よくあてはまる」から「全くあてはまらない」の範囲で回答されており、それぞれの尺度の質問項目の回答に大きな偏りは見受けられなかった。

3. 内的信頼性（表3）

CAPES-DDのドメインのクロンバックの α は情緒

および行動の問題0.82、親の効力感0.96であった。

表3 内的信頼性

尺度とドメイン	クロンバックの α	項目数
CAPES-DD		
情緒および行動の問題	0.82	30
情緒の問題	0.66	12
行動の問題	0.76	18
親の効力感	0.96	20
PAFAS	0.81	30
子育ての適応	0.79	18
子育ての一貫性	0.51	5
強制的なしつけ	0.76	5
前向きな励まし	0.60	3
親子関係	0.81	5
家庭への適応	0.76	12
親としての適応	0.08	5
家族関係	0.75	4
親のチームワーク	0.83	3

表4 併存妥当性 (他の尺度との関連)・収束妥当性 (他のドメインとの関連)

尺度・ドメイン	育児負担感	育児効力感	SDQ	PAFAS (子育ての適応)	PAFAS (家庭への適応)	CAPES-DD (情緒および行動の問題)	CAPED-DD (親の効力感)
育児負担感	1.00						
育児効力感	-0.41**	1.00					
SDQ	0.39**	-0.36**	1.00				
PAFAS (子育ての適応)	0.50**	-0.46*	0.41**	1.00			
PAFAS (家庭への適応)	0.51**	-0.51**	0.43**	0.38**	1.00		
CAPES-DD (情緒および行動の問題)	0.48**	-0.36**	0.39**	0.40**	0.44**	1.00	
CAPED-DD (親の効力感)	-0.38**	0.37**	-0.40**	-0.35**	-0.39**	-0.43**	1.00

注 **p<0.01, Spearmanの順位相関係数

PAFASのドメインのクロンバックの α は子育ての適応0.79、家庭への適応0.76であった。下位ドメインのクロンバックの α は0.6-0.8であったが、子育ての一貫性0.51、親としての適応0.08であり、クロンバックの α は著しく低かった。

4. 収束妥当性および併存妥当性 (表4)

CAPES-DDおよびPAFASの各ドメイン間の相関は0.35-0.44あった。他の尺度との相関は0.36-0.51の範囲であった。中程度の相関が認められたのは育児負担感とPAFAS子育ての適応、育児負担感と家庭への適応、育児効力感と家庭への適応であった。

5. 再テスト信頼性 (表5)

CAPES-DDの級内相関係数は0.62-0.95で再テスト信頼性が確認された。PAFASの級内相関係数は0.40-0.89で子育ての一貫性 (0.47) および親としての適応 (0.40) の下位ドメインは低かった。

表5 再テスト信頼性 (n=154)

尺度およびドメイン	級内相関係数
CAPES-DD	
情緒および行動の問題	0.78
情緒の問題	0.62
行動の問題	0.73
親の効力感	0.95
PAFAS	0.87
子育ての適応	0.83
子育ての一貫性	0.47
強制的なしつけ	0.65
前向きな励まし	0.72
親子関係	0.89
家庭への適応	0.80
親としての適応	0.40
家族関係	0.81
親のチームワーク	0.84

6. 構成概念妥当性

CAPES-DDの因子分析の結果9つの因子が抽出され(表6)、原版と異なるドメインとして抽出された。

原版では情緒の問題と行動の問題の2つのドメインが抽出されていたが、日本語版では9つのドメインが抽出された。ドメインIとIIは全て行動の問題、ドメインVとVIIは全て情緒の問題であったが、ドメインIII、IV、VI、VIIIは行動の問題と情緒の問題が混在していた。ドメインIXは情緒の問題が1つのみで独立していた。

PAFASの因子分析の結果、7つの因子が抽出されたが(表7)、原版もしくは日本語版とも異なるドメインとして抽出された。子育ての一貫性ドメインは2つの因子が抽出された。家族関係および親のチームワークドメインは項目の入れ替えがあったものの2つの因子に集約された。それ以外の前向きな励まし、親子関係、強制的なしつけ、親としての適応はドメインとしての収束は確認できなかった。

考 察

本研究では、CAPES-DD原版をもとに日本語版を作成し、信頼性と妥当性の検証を行い、内容妥当性・内的信頼性・併存妥当性・収束妥当性では一定の信頼性および妥当性が確認された。一方で、構成概念妥当性では原版と異なるドメインが抽出され課題を残した。

以下に、CAPES-DDおよびPAFAS日本語版を考察する。

1. 内容妥当性

定型児の保護者を対象にしたCAPES日本語版では「恐れて怖がっているように見える」、「大人の注目を受けずに何かをしていることが難しい」、「幸せそうに見えない、また悲しそうに見える」3項目において、対象者の7割以上がまったく当てはまらないと回答していた⁷⁾。しかし、発達障がいのある子どもの母親を対象にしたCAPES-DDの同様の質問項目では、子どもの深刻度を測ることができる項目であ

表6 CAPES-DD 日本語版因子分析

ドメインおよび質問項目	因子								
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
行動 他人の注目を必要とする	0.72	-0.12	0.29	0.27	-0.18	0.00	0.15	0.09	0.04
行動 物を壊す	0.62	-0.04	0.26	0.11	0.16	0.39	0.29	0.29	-0.14
行動 活発過ぎる、または落ち着きがない	0.59	-0.13	0.22	0.16	0.19	0.19	-0.12	0.20	0.04
行動 私(親)または他人を傷つける(例:叩く、嘔む、引っかく、つねる、押す)	0.57	0.05	0.31	0.23	-0.06	0.35	0.33	0.13	-0.11
行動 他人に失礼な音や言葉を発する	0.34	-0.22	0.29	0.21	0.09	0.28	-0.07	0.25	0.34
行動 友達と仲が良い	-0.09	0.67	0.12	-0.19	0.01	0.04	0.01	0.06	0.05
行動 他人と物を共有する	0.17	0.65	0.10	-0.24	0.08	-0.11	0.04	-0.05	0.05
行動 感情的になったり(例:泣く、悲しむ) 傷ついたりしている人をなだめる	-0.24	0.55	0.26	-0.03	-0.04	-0.11	-0.03	-0.06	0.07
行動 適切に何かを要求する	-0.01	0.50	-0.06	0.06	-0.23	-0.01	0.09	-0.09	0.14
行動 何か欲しいものがあるときに辛抱強く待つ	0.44	0.48	0.15	-0.20	-0.18	-0.18	-0.05	-0.05	0.17
行動 大人と仲が良い	-0.42	0.44	0.08	-0.10	0.09	-0.10	0.07	-0.22	0.25
行動 感情を適切に表現する	-0.20	0.41	0.04	0.08	-0.09	0.02	-0.06	0.01	0.25
行動 怒鳴る、叫ぶ、または絶叫する	0.31	0.06	0.94	0.27	0.14	0.13	0.07	0.24	0.23
行動 かんしゃくを起こす	0.44	0.03	0.67	0.28	0.07	0.09	0.20	0.39	0.07
情緒 自分が慣れている人から離れると感情的になったり(例:泣く、悲しむ) 怒ったりする	0.12	0.15	0.36	0.11	0.15	0.19	0.18	0.11	-0.13
情緒 習慣や周囲の変化に動揺する	0.20	-0.05	0.20	0.71	0.02	0.20	0.11	0.10	0.00
情緒 何かを恐れたり怖がっているように見える	0.12	-0.11	0.30	0.61	-0.13	0.28	0.18	0.06	0.30
行動 日々の自分の身の回りの世話に協力する(例:着替え)	-0.01	0.15	-0.17	-0.42	-0.17	0.21	0.18	-0.07	-0.06
情緒 一人で過ごす時間が過剰だ	-0.13	-0.07	0.14	0.05	0.81	0.24	-0.04	0.25	-0.06
情緒 物や空間を凝視する	0.20	-0.11	0.15	0.08	0.51	0.18	0.24	0.16	-0.02
情緒 手や体の動きを何回も繰り返す(例:手をヒラヒラさせる、体を揺り動かす)	0.23	-0.04	0.18	0.14	0.21	0.68	-0.01	0.18	0.07
行動 大人の注目を受けずに何かをしていることができる	0.33	0.51	0.20	-0.31	-0.25	-0.52	0.03	-0.20	-0.03
情緒 不満または悲しそうに見える	0.22	0.06	0.25	0.17	0.08	0.40	0.34	0.30	0.07
情緒 思い当たる理由もなくすぐに泣く	-0.05	0.01	0.22	0.16	0.17	0.08	0.63	0.14	-0.01
情緒 自分自身を傷つける(例:叩く、嘔む、引っかく、つねる)	0.34	-0.08	0.01	0.01	-0.07	0.09	0.58	0.24	-0.23
行動 頼まれたことに協力しない	0.22	0.01	0.23	0.05	0.16	0.11	0.14	0.58	0.00
行動 ぐずるまたは文句を言う	0.52	-0.06	0.43	0.46	-0.06	0.23	0.10	0.53	-0.04
情緒 活動的ではない・物事に無関心だ	-0.11	-0.05	0.08	0.08	0.35	0.17	0.31	0.51	-0.16
情緒 食べ物の好き嫌いが多いまたは食べない	0.28	0.22	0.25	0.00	0.06	0.19	0.09	0.35	-0.03
情緒 自分自身に対していい感情を持っているようだ	-0.09	0.38	0.14	0.01	-0.06	0.00	-0.07	-0.14	0.84
因子間相関									
I	1.00								
II	0.00	1.00							
III	0.25	0.14	1.00						
IV	0.05	-0.22	0.23	1.00					
V	-0.12	-0.09	0.12	-0.02	1.00				
VI	0.04	-0.12	0.05	0.25	0.17	1.00			
VII	0.09	0.06	0.08	0.08	-0.06	0.11	1.00		
VIII	0.12	-0.12	0.19	0.17	0.20	0.24	0.07	1.00	
IX	-0.05	0.10	0.18	0.09	-0.05	0.01	-0.12	-0.10	1.00

注 主因子法による因子抽出 プロマックス法

表7 PAFAS日本語版因子分析

ドメインおよび質問項目	因子						
	I	II	III	IV	V	VI	VII
〈親のチームワーク〉							
パートナーとはよい関係だ	0.90	0.13	0.20	0.52	0.33	-0.04	0.09
子育てでは、私はパートナーとチームとなって動く	0.86	0.25	0.18	0.33	0.24	0.14	0.12
〈家族関係〉							
私の家族はお互いに仲が良い	0.78	0.18	0.28	0.59	0.33	-0.03	0.02
私の家族はお互いに助け合う、または支えあう	0.78	0.13	0.38	0.47	0.36	-0.01	0.19
〈親のチームワーク〉							
子育てについてパートナーと意見が食い違う	0.61	0.41	0.11	0.17	0.47	0.29	-0.22
〈強制的なしつけ〉							
子どもが好ましくない行動をとっている時、子どもに怒鳴ったり怒ったりする	0.19	0.82	0.23	0.10	0.37	0.39	-0.01
子どもの好ましくない行動に対して、教訓となるように子どもにいやな思い（例：罪悪感や恥）を感じさせようとする	0.29	0.65	0.11	0.07	0.20	0.35	-0.04
子どもが好ましくない行動をとっている時は、子どもをたたたく	0.16	0.63	0.07	0.11	0.33	0.42	-0.20
子どもの行動や態度について子どもと言い争う	0.08	0.58	0.16	0.04	0.28	0.35	-0.16
子どもにイライラする	0.18	0.53	0.05	0.31	0.45	0.17	-0.01
〈親としての適応〉							
ストレスを感じる、または心配だ	0.49	0.61	0.24	-0.11	0.35	-0.15	0.29
悲しい、または落ち込んでいると感じる	0.41	0.46	0.02	0.21	-0.20	0.46	0.31
〈親子関係〉							
子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい	0.09	0.02	0.77	0.34	0.09	0.06	0.11
〈前向きな励まし〉							
子どもが好ましい行動をとっている時、子どもに注目する（例：抱く、ウィンクする、微笑む、キスをするなど）	0.23	0.17	0.71	0.24	0.08	0.09	0.25
〈親子関係〉							
子どもと話す	0.19	0.10	0.63	0.38	0.16	0.13	0.27
〈前向きな励まし〉							
子どもが好ましい行動をしている時には子どもをほめる	0.17	0.20	0.62	0.21	0.08	0.05	0.32
子どもが好ましい行動をした時には、おやつ、ほうび、または楽しい活動を子どもに与える。	0.07	-0.03	0.37	0.08	0.10	0.03	0.36
〈親子関係〉							
子どもと一緒に過ごすのが楽しい	0.35	0.15	0.46	0.77	0.32	-0.02	0.29
〈親としての適応〉							
幸せだと感じる	-0.39	-0.09	-0.26	-0.77	-0.13	0.12	-0.08
〈親子関係〉							
子どもとはよい関係だ	0.29	0.15	0.47	0.69	0.22	-0.18	0.39
〈親としての適応〉							
自分の人生に満足している	0.40	0.08	0.06	0.60	0.00	-0.14	0.09
〈親子関係〉							
子どもを誇りに思う	0.28	0.02	0.56	0.60	0.28	0.07	0.01
〈親としての適応〉							
子どもが感情的になった時、もしくは親自身が落ち込んでいたりストレスを感じたりしている時、親として一貫した対応ができる	0.37	0.26	0.26	0.47	0.10	-0.06	0.39
〈家族関係〉							
私の家族はお互いを批判する、またはお互いをみくだす	0.44	0.34	0.15	0.18	0.86	0.34	-0.22
私の家族はケンカする、または言い争う	0.24	0.34	0.07	0.11	0.80	0.20	-0.03
〈子育ての一貫性〉							
子どもが言われたことをしない時には、根負けして自分でする	0.05	0.41	0.15	-0.04	0.22	0.75	0.07
子どもが怒ったりパニックをおこしたりした時には、子どもが欲しいものを与える。	0.09	0.37	0.08	-0.12	0.20	0.71	0.01
子どもが好ましくない行動をとっている時、何かが起こると脅す（例：テレビを消すなど）が、それを実行しない	0.13	0.49	0.30	-0.15	0.35	0.62	-0.13
〈子育ての一貫性〉							
子どもの好ましくない行動には、いつも同じように対処する	0.04	-0.12	0.25	0.14	-0.07	0.01	0.69
子どもが好ましくない行動をとっている時に、その結果となるものを使って対処する（例：おもちゃを取り上げるなど）	-0.03	-0.36	0.14	0.08	-0.12	-0.04	0.41
因子間相関							
I	1.00						
II	0.26	1.00					
III	0.24	0.14	1.00				
IV	0.45	0.11	0.39	1.00			
V	0.36	0.39	0.24	0.25	1.00		
VI	0.08	0.42	0.18	-0.16	0.32	1.00	
VII	0.06	-0.04	0.25	0.22	-0.13	-0.16	1.00

注 主因子法による因子抽出 プロマックス法

ると考えられた。CAPES-DD日本語版「不満または悲しそうに見える」の質問項目はCAPESでは「幸せそうに見えない、また悲しそうに見える」と訳されており、異なる日本語版が作成されている。意図が異なって伝わる可能性があり、今後検討が必要である。

PAFASの質問項目「子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい」に関して、日本語版を作成した先行研究では身体的な愛情表現を行わないのは日本人の特性であると考察していたが⁷⁾、今回は異なる結果となった。発達障がいのある子どもをもつ母親の子育ての適応を測る項目であると考えられた。

2. 内的信頼性

CAPES-DDのクロンバックの α は情緒および行動の問題0.82と親の効力感0.96であり内的信頼性は確認できた。一方で、ドメインの情緒の問題のクロンバックの α は0.66であり、内的信頼性に課題を残した。情緒の問題の質問項目について、再検討が必要であると考えられた。「手や体の動きを何回も繰り返す」は情緒の問題として内向のドメインに分類されているが、「手や体の動きを何回も動かす」ということは情緒の問題でなく、行動の問題としても受け止められた可能性がある。

PAFASのクロンバックの α は子育ての適応で0.79と家庭への適応で0.76であり内的信頼性は確認できた。一方で、PAFASの下位ドメインの子育ての一貫性は0.51、親としての適応は0.08で信頼性に課題を残した。例えば、PAFASの下位ドメインの強制的なしつけの項目「子どもにイライラする」と親としての適応の項目「ストレスを感じる、または心配だ」は、区別がつきにくかったことが原因と推測された。

3. 併存妥当性・収束妥当性

CAPES-DDの情緒および行動の問題と親の効力感のドメインは全体への収束妥当性および併存妥当性が確認された。CAPES-DDのドメインの情動および行動の問題はSDQ、親の効力感と育児効力感が対応しており、併存妥当性が確認された。

PAFASでは、子育ておよび家庭への適応のドメインは全体への収束妥当性および併存妥当性が確認された。子育ての適応と家庭への適応は育児負担感が対応しており、併存妥当性が確認された。これらはPAFAS日本語版と同様の結果となった⁷⁾。またPAFASの子育ての適応と育児負担感 ($r_s=0.50$)、家庭への適応と育児負担感 ($r_s=0.51$) に相関があり、子育て

の適応と家庭への適応との関連要因に育児負担感があると考えられ、先行研究²⁾を支持すると考えられた。

4. 再テスト信頼性

CAPES-DDおよびPAFASのドメインは級内相関係数の結果より、再テスト信頼性が確認された。一方で、PAFASの下位ドメインの子育ての一貫性と親としての適応の級内相関係数は低く、内的信頼性の考察と同様に再検討が必要である。

5. 構成概念妥当性

1) CAPES-DDのドメイン

CAPES-DDの原版では情緒および行動の問題の2つのドメインが抽出されているが、CAPES-DD日本語版のドメインでは9つのドメインが抽出され、原版と異なる結果となった。その理由として、CAPES-DD原版では、さまざまな障がいのある子どもに活用できる尺度開発を求められたが、実際には対象者がASDに偏っており課題となっている¹¹⁾。つまり、先行研究ではASDのある子どもが大多数を占めており、障がいの種類によって情緒および行動の問題のドメインに影響する可能性が指摘されている。CAPES-DD日本語版作成にあたっては、ASDやADHD等またそこからくる情緒と行動の問題がドメインに影響していると考えられるものの、発達障がいの情報は収集していなかったため、さまざまな障がいのある子どもに活用できる尺度開発につながったか今後の検討課題である。

2) PAFASのドメイン

PAFASの原版では7つのドメインが抽出されている。本研究では7つのドメインが抽出されたものの、原版とは異なるドメインが抽出された。加えて、PAFAS日本語版とも異なるドメインとなった⁷⁾。PAFAS日本語版ではアンケート調査の対象が保育園を利用している定型児の母親である⁷⁾。一方、本研究の対象者は発達障がいのある子どもの母親であることが原因であると推察されるため、今後はさまざまな子どもを対象にして調査していくことが求められる。

本研究において、開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) Sanders MR. Triple P-Positive Parenting Program: towards an empirically validated multilevel parenting and family support strategy for the prevention of behavior and emotional problems in

- children. Clin Child Fam Psychol Rev 1999 ; 2(2) : 71-90.
- 2) 石津博子, 益子まり, 藤生道子, 他. 前向き子育てプログラム (Positive Parenting Program; Triple P) による介入効果の検証. 小児保健研究 2008 ; 67(3) : 487-495.
- 3) 柳川敏彦, 平尾恭子, 加藤則子, 他. 児童虐待予防のための地域ペアレンティング・プログラムの評価に関する研究. 子どもの虐待とネグレクト 2009 ; 11(1) : 54-68.
- 4) McWilliam J, Brown J, Sanders MR, et al. The Triple P implementation framework: The role of purveyors in the implementation and sustainability of evidence-based programs. Prev Sci 2016 ; 17(5) : 636-645.
- 5) Mazzucchelli TG, Hodges J, Kane RT, et al. Parenting and family adjustment scales (PAFAS): validation of a brief parent-report measure for use with families who have a child with a developmental disability. Res Dev Disabil 2018 ; 72 : 140-151.
- 6) Mazzucchelli TG, Sanders MR, Morawska A. Child Adjustment and Parent Efficacy Scale-Developmental Disability (CAPES-DD). Brisbane, Australia: Parenting and Family Support Centre, University of Queensland 2011.
- 7) 藤岡寛, 田中陽子, 涌水理恵. The Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) およびThe Child Adjustment and Parent Efficacy Scale (CAPES) の日本語版作成の試み. 厚生指標 2016 ; 63(15) : 20-28.
- 8) 中嶋和夫, 齋藤友介, 岡田節子. 育児負担感指標に関する因子不変性の検討. 東京保健科学学会誌 1999 ; 2(2) : 72-80.
- 9) 金岡緑. 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale: PSE尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 2011 ; 70(1) : 27-38.
- 10) 中島俊思, 伊藤大幸, 谷伊織. 日本語版Strengths and Difficulties Questionnaireの構成概念妥当性の検証: 1 郊外市の全数コホートデータを用いた検討. 臨床精神医学 2012 ; 41(7) : 917-924.
- 11) Emser TS, Mazzucchelli TG, Christiansen H. Child Adjustment and Parent Efficacy Scale-Developmental Disability (CAPES-DD): First psychometric evaluation of a new child and parenting assessment tool for children with a developmental disability. Res Dev Disabil 2016 ; 53-54 : 158-177.
- 12) 森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝. 育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究. 小児保健研究 2015 ; 74 : 519-526.
- 受付 2019. 8. 29
採用 2020. 1. 8

